

「普通」の線引き

「障害は個性だ」と言う人がいるが、私はそうは思わない。周りと違うということが生きづらさを感じさせているならば、「障害は個性だ」などと言うのは軽率だと思うからだ。しかし、本書に登場する「妻」が私の考えを少しばかり変えた。

この本はアスペルガー症候群である妻とその夫の日常が描かれたノンフィクションである。「地球人」の普通が「宇宙人」である妻には難しいと理解していても、驚きや発見が絶えない日々を夫目線で見つづられている。本書は二人の会話が大半を占めていて、ぶつかりあうこともあるものの、お互いを大切にしていることが会話から感じられるはずだ。決して「普通」ではないけれど、理想的な夫婦だと感じた。

自閉系の障害をもつ人の考えや感覚は、一般的なものとはズレがある。例えば、TPOに合った話題や言葉づかいを選んだり、空気や言葉の裏を読んだりといったことができない。それゆえ、妻は一方的に自分の興味のある話題をしゃべり続け、相手の話になると反応の仕方がわからないため、真顔でとんちんかんな受け答えをしてしまう。時には悪ふざけだと勘違いされ、相手を怒らせてしまうこともあるが、相手が怒っていることさえも気づかないのだ。地球人であれば意識せずとも普通にできることが、できない。ゆえに、本書では「宇宙人」とされている。ここで、努力で地球人の中に紛れようとしている、健気な妻の一言を引用しておく。

「普通にするのって何でこんなに難しいんだろう」(P89)

そんな妻であるが、大学時代は言語学を学び、内職として翻訳業をしている。アスペルガー症候群というのは知的障害がないと知っている私でも、英語を話せるという事実には驚いた。自閉症のことを知らない人や、誤解や偏見を持っている人であれば、なおさら驚くだろう。さらに驚くことに、この本を書いているのは夫ではなく「エイリアン」である妻本人なのだ。それを知った私は、自分の中の「障害」や「普通」の線引きを疑わずにはいられなかった。

確実に妻は生きづらさを感じている。仕事や人と関わることで感じるストレスの多さに耐えきれず、好きでもないお酒に手を出し、アルコール依存症にまで至ってしまったほどだ。妻は「普通」であるべく、生まれつき欠如している部分を努力でカバーしてきた。もちろん、まだ「地球人」との意識のズレが存在しているわけだが、そのずれた意識がこの本を書き上げたのだ。本を書くことは簡単なことではない。それこそ「普通」はできないことである。

障害が生きる上で個性となるためには、生きづらさを解消しなくてはならない。その際、周囲の理解が不可欠となる。そのきっかけがこの本となるのではないだろうか。私は「障害は個性だ」と言える日が来ることを願い、この本を薦めたい。